

西肥前陶磁器と商人活動 —伊万里津における商業活動を中心として—

石川 和男

はじめに

われわれは、日常使用・消費している生産物や製品を、その生産・製造場所（地名）で呼ぶことがある。その素材についても同様である。日常、食器として使用している「瀬戸物（せともの）」「唐津（からつ）」などはその代表であろう。またその生産物・製品をそれらが送り出される場所で呼ぶこともある。「天津甘栗」は、中国の天津で生産された栗ではなく、天津という地名から明らかかなように天津の港から海外へと輸出されることに由来している。こうした例からは、農業や水産業によって産出される生産物に限らず、工場で製造・加工される製品についても、同様の場合が多々あることに気づかされる。

本稿では、17世紀初め、わが国初の磁器として製造が始まり、国内だけではなく、早くから海外で需要が高まった「伊万里焼（IMARI）」を中心に取り上げる。それは西肥前を中心に製造が開始され、できあがった製品（商品）は、伊万里津から海外や国内各所へと積み出された。その積出に関わった伊万里商人やその買付に伊万里津へと足を運んだ旅商人、さらにそれが全国へと販路を拡大した状況を中心に考察する。また伊万里焼の単なる商品としての製造や流通だけではなく、それらを流通させるために機能した物流や金融などの流通補助機能についても言及していきたい。

1 わが国における陶磁器の誕生

(1) 肥前磁器の誕生と成長

17世紀初め、肥前有田での磁器生産は、藩の殖産政策や技術革新によって発展し、大陸（中国）磁器に代わり国内外の需要に応えることになった。染付や色絵付が施された磁器は、海外だけでなく、国内でもその販路を拡張していった。そのため「諸州に数品有る中にも肥前国伊万里焼と云うを本朝第一」という評判が早くから定まっていた（日本山海名産図会、伊万里市歴史民俗資料館（1996）1）。伊万里焼は、西肥前一带で焼かれた磁器の総称である。それは近代以降、伊万里市大川内町などで焼かれている「伊万里焼」とは区別するため、「古伊万里（焼）」とも呼ばれる。古伊万里は、1610年代から焼き始められたわが国最初の磁器であり、

有田中心に民窯で年間数十万個から数百万個がつけられた（伊万里市教育委員会（2002）38）。

野上（2017）では、古伊万里、つまり近世肥前磁器の生産と流通について整理している。肥前磁器は、近世中期まで国内磁器市場をほぼ占有していた。肥前地域は、わが国本土の西端に位置し、大陸に近いために古くから交流があった。そこには平和的な文物・人的交流だけでなく、武力衝突や緊張もあった。肥前磁器はこうした正負の交流によって誕生、発展した。肥前磁器の技術は、16世紀末に朝鮮半島から導入された。有田焼の陶祖李参平こと金ヶ江三兵衛は、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に鍋島軍が連れ帰った何千人の陶工のうちの1人であった。つまり、磁器生産には大陸の技術的影響があった。肥前は磁器が誕生した後も大陸と深く関わり、近世初期はその影響を受け続けた。17世紀後半、肥前の陶業が輸出産業として急速に発展したのは、大陸の王朝交代による混乱により、大陸での磁器輸出が激減した事情が影響したためである。また近世中期以降、国内で肥前磁器が全国に流通し、その使用が一般化したのも大陸における混乱収束によって磁器の再輸出が本格化し、肥前磁器が国内市場を開拓せざるを得なくなった事情が影響した。その結果、肥前磁器は全国津々浦々に流通することになった（野上（2018）425）。したがって、肥前磁器は大陸からその生産技術がもたらされ、その影響を受けただけでなく、わが国における磁器の市場形成も影響を受けたことになる。

また肥前磁器は、一産地の窯業史だけでなく、わが国の文化・経済・社会史やアジア史も反映している。近代以降、わが国は工業製品を海外輸出することにより、技術立国、貿易立国として存立するようになった。現在の肥前磁器産業は伝統産業とされるが、肥前磁器はヨーロッパを中心とした世界中の需要に応えた最先端の工業製品であり、その後世界に渡ったわが国の工業製品の先駆けであった（野上（2018）426）。

（2）佐賀藩による磁器市場の統制

わが国最初の磁器が焼成された有田は、400年以上の歴史を有する和様磁器の発祥地である。有田焼は李参平が当初は多久で陶器を焼いていたが（<https://aritamaki.jp/aritamaki/history.html>）、元和2（1616）年に有田泉山で白磁鉢を発見し、天狗谷窯で白磁器を焼いたことに始まる。1640年代には、清の技術者から得た色絵技法が有田に伝えられた。これは伊万里の豪商東島徳右衛門が、寛永21（1644）年に長崎に来航した清の技術者から陶磁器への彩画着色法を伝授されたことによる。それが有田の初代柿右衛門（酒井田喜三右衛門）に伝えられた。柿右衛門家古文書『赤絵之具覚』には、初代柿右衛門がこの頃に呉須権兵衛らの協力によって赤絵付けに成功したとしている（山田（2013）224）。こうした技術伝播の背景に東島徳右衛門という商人が関わっていたことは興味深い。それは商人が技術の仲介役を果たしたことを示しているためである。

<写真1 泉山磁石場（筆者撮影）>



初代柿右衛門の革新的工芸技術は、産地に影響を与え、正保3（1646）年に佐賀藩が有田の窯業を藩特産業とし、柿右衛門家を御用焼物師とした。柿右衛門家は、江戸期から有田の窯元として製作から赤絵付を一貫して行うことが例外的に認められた。しかし、赤絵付技術は秘法として藩からの漏洩が厳格に禁じられた。そのため有田焼の歴史は、佐賀藩によるわが国磁器市場占有を目的とした統制史の側面もある。窯焼き（窯元）を厳格に管理するため、意図的に競争を制限し、藩直営の藩窯を設けて藩主と藩庁が一体で運営した。江戸期の有田では、藩の陶磁器専売制度と徹底した分業による地域別の閉鎖的な協働の仕組みであった（山田（2013）224）。ここでは分業と協働が取り上げられているが、分業は、単一の職人やあるいは組織が製品を完成させることができないことを意味している。また協働という言葉ではあるが、分業による協働が連続しなければ、製品の完成を見なかったことは、一貫して製造が可能な組織を生み出すことを許さなかった事情が影響していたことも理解できる。

こうして有田は、磁器生産には不可欠な陶石鉱床の発見と生産手法の開発により、和様磁器の主要産地となった。その発展により藩の統制も強化され、分業で成立する閉鎖的生産・販売体制が確立された。有田はこうした佐賀藩の厳しい統制下にあったが、近代以降の廃藩置県による幕藩体制の終焉により、産地の分業構造に支えられた藩の陶磁器専売制度は崩れた。そして藩による庇護の消滅は、磁器産地を自由化へ向かわせることになった。これは過当競争による窯元の困窮と技術劣化という事態も引き起こすことになった。他方、陶磁器専売制度は、藩の統制だけでなく、京都・大阪において販売代金回収力のない零細な窯元の保護を目的とした金融機能もあった。そのため、制度崩壊は資本力の小さな窯元の生産を停滞させた（山田（2013）224）。まさに藩による管理がなければ、陶磁器の販売制度が成立しなかったことを証明しており、これに代わる制度形成をみるまでに零細規模の生産者（窯元）が事業から退出した状況もあったようである。これは社会的という大袈裟だが、地域における損失であったといえる。

(3) 伊万里焼（古伊万里）の形成

「伊万里焼」の生産地（窯場・皿山）として伊万里に属するのは大川内（いわゆる民窯）や市ノ瀬山などに過ぎず、大半は有田に所在していた。その焼物を「伊万里焼」「伊万里」と呼んだのは、その流通起点である積出港が伊万里津であったためである（伊万里市歴史民俗資料館（1996）1）。これは「はじめに」で取り上げたように、積出港が一般の商品名として流通することになった例である。

<写真2 大川内山（1）（筆者撮影）>



<写真3 大川内山（2）（筆者撮影）>



伊万里焼の歴史は、色絵が色絵具の発色を良好にするため、白素地の調整が必要であったことに遡る。九州陶磁文化館では、陶磁資料の収集・調査のため、その年代特定の1つとして素地の色で判断している。近世の伊万里焼は、近代以降は産地名で呼ばれ、有田で焼かれると有田焼、伊万里市で焼かれると伊万里焼と呼ばれるようになった（黒田・大森・副島（2008）114）。

大陸では元の時代であった14世紀に染付（呉須顔料を用い素地に文様を描く方法で釉薬をかけて焼くと青色に変化、そのままの場合は黒く発色）が始まり、青磁に代わり普及するようになった。わが国では景德鎮での染付が高級磁器として輸入されていた。その後、先にあげた朝鮮から来日した陶工が有田での焼成に成功し、それが肥前磁器としてわが国初の磁器誕生となった（黒田・大森・副島（2008）114）。こうしたわが国への文化伝播は、まさしく正負両面があったものと理解できよう。

2 伊万里津における陶磁器積出の拡大

(1) 伊万里津の形成

中世の時代、伊万里は伊万里浦と呼ばれた。伊万里津と呼ばれるようになったのは近世初めであった。中世の終わり、伊万里は松浦党の末流伊万里氏の支配領治下にあった。伊万里氏は、天正 4 (1576) 年に龍造寺隆信に攻められ降伏し、隆造寺氏の覇権も鍋島直茂に代わり、伊万里は佐賀鍋島藩領となった。やがて豊臣秀吉の朝鮮出兵により、鍋島直茂の軍船も伊万里を発した。この頃には既に伊万里ノ津と呼ばれていた (伊万里市歴史民俗資料館 (1996) 4)。表 1 は伊万里津が形成された概略を 16 世紀末からを示している。

<表 1 伊万里津の形成史年表>

元号 (西暦)	出来事
文禄元 (1592) 年	鍋島直茂の軍勢伊万里より出発する。帰国のとき浄光寺に宿泊
元和 8 (1622) 年	鍋島勝茂参勤の途次 4、5 日、伊万里に逗留し、浄光寺を宿所とする。楠久島を馬牧に選定
寛永 6 (1629) 年	伊万里町下より高胡崎まで新土井築留め新田できる (高庄文書)
寛永 19 (1642) 年	伊万里商人東嶋徳左衛門が大坂商人の有田「山請」にかかわる
正保 4 (1647) 年	正保一国絵図成り、伊万里町石高 378 石余、伊万里津遠浅などと記す
承応 2 (1653) 年	佐賀藩「小物成帳」に伊万里津の運上銀 2 貫 364 匁余の記述
元禄 3 (1690) 年	伊万里心遣役へ手頭を發し、市中取締を命じる
宝永 3 (1706) 年	市内大火、町家 416 軒などを焼失、男女 15 人焼死

(出所) 伊万里市歴史民俗資料館 (1996) 5 頁 (一部改)

そして、鍋島直茂に扈従来日した多くの帰化朝鮮人陶工らは、有田泉山・西有田竜門・伊万里大川内山で磁石礦を発見し、元和元 (1616) 年頃にわが国初の磁器を製作し始めた。製作された白く堅牢な磁器は、国民の嗜好に合致し、各地で磁器窯が築かれ、佐賀鍋島藩の特産品となった。鍋島藩では、伊万里港を積出港に指定し、陶磁器が全国へ積み出されるようになった (伊万里歳時記、古賀 153-154)。近世の伊万里川河口付近は伊万里津と呼ばれた。寛永年間 (1624-1643 年) には、有田など西肥前地域の焼物が積出されるようになった。伊万里津は、有田皿山など産地から運ばれた陶磁器の積出を一手に引き受けた。近世に西肥前地域で焼かれた磁器が「伊万里焼」と呼ばれたのは、先にも取り上げたように積出港の名に負っている (伊万里市教育委員会 (2002) 38)。ここから積み出された焼物は、国内外で「イマリ (IMARI)」と呼ばれた (伊万里市陶器商家資料館 No.3)。まさしく積出港の名が世界へと広がったものであ

る。

伊万里津は、現在の伊万里川河口にあたる。正保4（1647）年「肥前一国絵図」で初めて「伊万里町」が記載されており、「伊万里津遠浅、舟大小五六十艘程留まる」とされ、この頃から港として利用された。17世紀後半に肥前磁器の積出が本格化すると整備され、鍋島藩は元禄3（1690）年に伊万里津の重要性を認め「伊万里心遣役」という役人を任命した（伊万里市陶器商家資料館資料）。このようにして17世紀後半に伊万里津は形成されたが、その範囲は現在の市街地の半分以下であったようだ。伊万里津の発展は、有田町中心に肥前陶磁器積出地としての利があり、上方をはじめ国内各地の港と海上交通の要所にあったことである（伊万里市郷土研究会（2019）2）。こうして港（津）のある場所に多くの商品が集まっただけではなく、多くの人が集まり繁栄したことは伊万里津もその例外ではなかった。

（2）セラミックロードの起点としての伊万里津

他方で17世紀中頃には、大陸では明から清への政権交代によって世情不安が拡大した。清は明勢力の残党で台湾に割拠していた鄭成功政権の孤立化を図り、明暦2（1656）年から商船の対外貿易を禁止し、万治4・寛文元（1661）年に海岸沿いの住民を30里内陸へ移住させる海禁政策をとった。そのため、同国最大の窯業産地であった景德鎮からの陶磁器輸出は途絶えることとなった。当時、ヨーロッパの上流階級においては、異国情緒溢れた神秘的な東洋への憧れがあり、東洋の美術工芸品の収集熱が高まっていた（伊万里市陶器商家資料館 No.1）。そのため景德鎮からの輸出が途絶えたことは、ヨーロッパでは一大事となった。

当時、ヨーロッパとアジアとの交易の主役であったオランダは、供給が絶たれた中国磁器に代わる製品を探し、品質が中国磁器並みの高水準であると判断された有田磁器に白羽の矢が立った。そこで有田磁器は、寛永元（1624）年頃から伊万里港を経て長崎に送られ、その後オランダ東インド会社により、東南アジアのバタビア、アフリカの喜望峰を経てヨーロッパへと輸出された（伊万里市陶器商家資料館 No.1）。こうして元和元（1615）年から嘉永元年（1848年）までに入港したオランダ船は715隻に達し、この間に欧州に輸出された肥前陶器は数百万個にのぼったとされる（伊万里歳時記、古賀153-154）。現在もこの間に輸出された磁器が海外の美術館や博物館などに展示され、当時のわが国における技術の卓越性と時間を越えた芸術性を伝えている。

1660年代から本格化したオランダ東インド会社による有田磁器の輸出は、1670~80年代が最盛期であった。有田磁器は先にあげたように海外では「IMARI」と呼ばれ、その名を世界に広めた。伊万里は高価格ではあったが、柿右衛門様式をはじめとして需要が高く、王侯・貴族に愛好された。この背景には、18世紀ヨーロッパで流行した複雑で装飾的な曲線によるロココ調の

美術や建築の風潮があった。そのため、色絵磁器の豪華で繊細な図柄は、それに適合した。こうしたヨーロッパへ続く海のシルクロードで運ばれ、伊万里津は東西を結ぶ海の道であったといえる。そして、壮大な「セラミックロード（陶磁の道）」の出発点となった（伊万里市陶器商家資料館資料 No.1）。海上輸送路は、大航海時代が終わり、ヨーロッパ列強がその覇権を争う時代になろうとしていた時代ではあったが、文化的なつながりが時代を超えて現代に続いていることは評価がされてよいだろう。

しかし、17世紀終わりには大陸の国内情勢が安定し、大陸からの磁器輸出が再開されることとなった。そして18世紀に入るとアジアとヨーロッパとの交易の主役がオランダからイギリスへと移り、ヨーロッパ窯芸が発展するようになった。18世紀末には東洋趣味に代わり、古いヨーロッパ的なもの見直しによる新古典主義が復活した（伊万里市陶器商家資料館 No.1）。これにより「IMARI ブーム」が完全に消失することとなった。

（3）伊万里津の繁栄

伊万里津は、有田皿山など肥前の焼物産地から運ばれた陶磁器の積出を一手に引き受け、国内外に「伊万里」（古伊万里）の名が広まっていった。国内では寛文元（1661）年頃、紀州商人が伊万里津で陶磁器の江戸方面へ積出を開始した。正徳年間（1711~1715年）には、伊万里商人が京都・大阪で取引し、寛政2（1790）年には、対馬藩の手を経て朝鮮とも交易をしていた（伊万里市陶器商家資料館資料）。ここでは国内の流通経路の拡大だけではなく、以前とは形を変えた大陸との交流が観察できる。

国内諸藩の商人が伊万里津に入った時期は早かったとされ、あとで取り上げる『紀州宮崎陶器商人由来』には、紀伊国有田郷箕島の商人が同国産の漆器を積んで伊万里津に入り、帰り船に陶器を満載して、関東で販売したのが寛文の頃（1666~1672）としている。この時期から1世紀以上を経た天明9（1789）年、伊万里津を訪れたわが国最初の銅版画家であった司馬江漢は『西遊旅譚』のなかで「焼き出す陶器、日本国中にいたる」と記している（伊万里市教育委員会（2002）38）。したがって、連綿と陶磁器の積出が続いていたことがわかる。

寛政元（1789）年、伊万里津海陸旅出及旅陶器商人持込荷について、『伊万里歳時記』には紅花、染藍、綿、綿布、呉服、鋳物、海産物、藁工品・蠟・木材・油脂・牛馬その他70余種に及ぶとされており、海陸民衆の生活物資集散地でもあった。天保6（1835）年には伊万里津からの国内向け積出陶器は35万6,000俵にのぼったとされる（伊万里歳時記、古賀153-154）。積出陶器を数える際に「俵」という単位が使用されたが、これは最後に取り上げる物流を支える技術としての包装が藁によって行われており、それによるものである。

この頃の伊万里津は、伊万里川の両岸や街道、水路に沿いに陶器商人が店や倉が軒を並べて

いた。『伊万里歳時記』巻二「天保6(1835)年陶器商人事」には、80名の陶器商人の名前が残っている。同じく『伊万里歳時記』巻二の文政7(1824)年の資料では、伊万里津は「千軒在所」といわれたが、実数は伊万里津に隣接する新田村の一部などを「郷津」に含め「百軒程」と記載されているが、町家の1割が陶器商家であった(伊万里市陶器商家資料館 No.3)。船1艘に対する積載が3,500俵とすると、1年間に延べ90艘の船が伊万里湾を出入りしたこととなる。近代初めの統計においても年間20数万俵の記録がある。伊万里津の焼物商人は、80軒程であったため、1軒あたり平均3千数百俵の取扱量であった(伊万里市郷土研究会(2019)2)。これら陶器商家には、筑前・紀州他、下関・出雲・越後・伊予などの商人が往来した(伊万里市陶器商家資料館資料)。したがって、各商家によって扱う量は差があったと考えられるが、各商家では多くの陶器を取引していた様子がわかる。表2は、伊万里を中心として町ごとの商人の所在を示している。これら商人の中から当時やその後の伊万里経済だけではなく、政治を動かした商人が出てきたことも興味深い。

<表2 陶器商人(之)事>

中町	直太郎
上下町	弥惣次 伊右エ門 太兵衛 忠兵衛
中下町	巳之吉 三次郎 治三郎 治右エ門 太次右エ門 七兵衛 卯之助 久兵衛 徳七 善兵衛 善三郎 吉五郎
本下町	武右エ門 弥助 勘兵衛 鹿太郎 弥兵衛 佐兵衛 喜兵衛 源次郎 清吉 平右エ門 市右エ門 米次郎 卯助 伊左エ門(犬塚家5代目当主 二世犬塚 伊左衛門盛富) 岩次郎 政右エ門 弥右エ門
上土井町	卯兵衛 忠次郎 長右エ門 幸右エ門 兵次郎 城太郎 儀右エ門 亥五郎
浜町	近兵衛 源七(常三郎と改名) 重四郎 兵助 庄吉 竹次郎 嘉兵衛
新田村	梅五郎 七太郎 久米次郎 虎五郎 靄吉 益太郎 兵次郎 吉次郎 太兵衛 市兵衛 甚兵衛 伝右エ門 孝吉
有田町	光右エ門 彦兵衛 利左エ門 孫三郎 利助 利右エ門 長右エ門
立町	弥七 政右エ門 卯右エ門 作右エ門 新十 伊左エ門 重右エ門

(出所) 前山博(1990) 368-369頁

近代になると、『伊万里歳時記』の「明治25年(1892)書上」では、伊万里町は戸数956軒、うち陶器商93軒、諸国問屋45軒、赤絵窯3軒、150石積以下6石積まで船40艘が伊万里川を上下し、町中は依然として終日目おとしの音と荷車・船積みの音が絶えなかったと伝えられている。陶器商の資金は、累積資本の他、陶器講の割合が大きかったが、明治15(1882)年に佐賀県初の私立銀行「伊万里銀行」が設立された。当初資本金は500円株30万円、「500円株と

<表 3 伊万里津（伊萬里津）関係年表>

元号（西暦）	できごと
元久 2（1205）年	水軍松浦党の有力家伊万里氏一族大河内氏の『源重平地頭職補任案 写し（大河内家文書）』に「伊万里浦」と記される
天正 12（1584）年 （1580年代）	龍造寺隆信が没し、佐賀藩祖の鍋島直茂が伊万里地方を治める
文禄元（1592）年	この頃、岸岳（唐津市北波多・相知町）周辺で、松浦党波多氏に保護されていた朝鮮半島の陶工達によって唐津焼がつくられ始める
文禄 2（1593）年	文禄・慶長の役（1592~1598年）で伊万里浦が鍋島直茂などの軍船の出兵基地となり、港の整備が進んだ。
文禄・慶長の役 （1592~1598年）	岸岳の波多氏が豊臣秀吉に滅ぼされ、岸岳周辺の陶工達が肥前（佐賀・長崎）の各地に散らばり、伊万里地方でも盛んに唐津焼がつくられ始める
元和元（1616）年	この頃鍋島直茂が朝鮮半島の陶工を連れ帰る
寛永年間 （1624~1643年）	朝鮮半島から来た李参平（金ヶ江三兵衛）が有田に移り住み、泉山で陶石を発見、わが国初の磁器をつくった
寛永 15（1638）年	この頃伊万里焼（肥前磁器）が伊万里から積み出され始める。伊万里の東島徳左衛門や岩永伝右衛門らが取り扱う
正保 4（1647）年	京都の松江重頼が書いた『毛吹草』に「唐津今利ノ焼物」と初めて記され、唐津焼（肥前陶器）や伊万里焼が関西方面へ広まっていったことが記される
	山本神右衛門重澄が初代皿山代官になり、伊万里地方を治める
	『肥前一国絵図』にはじめて「伊万里町」「伊万里津」と記される。この頃までに町や港が整備されていた
	この頃東島徳左衛門が、中国人から色絵付けの技法を学び、有田の喜三右衛門（初代柿右衛門）に教え、色絵磁器がつくられ始めた
	この頃伊万里焼が中国船で長崎から東南アジアへ積み出され始める
承応 2（1653）年	『萬御小物成方算用帳』という佐賀藩の税金帳簿には伊万里津の収税が藩内の他の津に比べて突出し、藩内で最も重要な港であったことがわかる
万治 2（1659）年	長崎の出島のオランダ連合東インド会社（V.O.C.）が中国磁器の代わりに伊万里焼を、ヨーロッパへ本格的に輸出するようになった
寛文 2（1662）年	長崎出島に「伊万里焼物見世小屋」が置かれる
寛文 8（1668）年	この頃江戸から伊万里屋五郎兵衛が有田に伊万里焼を買付に来て、江戸方面へも伊万里焼が広まり始めた
元禄 3（1690）年	伊万里津は旅人が多く集まったため、佐賀藩が伊万里津の取締のため、伊万里心遣役を設置。上黒尾に役屋敷があった
享保年間（1716~1735年）	この頃伊万里の豪商・前川善左衛門清英が200石積の手船2艘で大坂へ陶磁器を積み出す
安永年間（1772~1780年）	この頃伊万里津の西亀蔵が朝鮮向けの陶磁器輸出を開始
	伊万里湾最大の干拓地で面積約160町歩の八谷搦（はちやがらみ）は八谷善兵衛が奉行し、伊万里町や二里町などの豪商や豪農の力でできあがった
天明 9（1789）年	伊万里津を訪れた日本最初の銅版画家・司馬江漢が『西遊旅譚』（1794年）において、「焼き出す陶器（せともの）、日本国中に広まる」と記し、伊万里焼が全国に広まっていったことがわかる
寛政 11（1799）年	『日本山海名産図絵』の「陶器（やきもの）」の項に「諸州数品有中にも肥前国伊万里焼と云を本朝第一とす」と記される
享和 3（1803）年	伊万里町に白壁土蔵造の家が建ち始める（『伊万里歳時記』）
文政 7（1824）年	伊万里町の町屋は約800軒となり、「千軒在所」と呼ばれるほど栄える（『伊万里歳時記』）
天保 3（1832）年	有田の町人学者・庄司孝祺は『儉法富強録』に「当国ハ・・・国産寡シトイヘドモ・・・米価十萬兩余、陶器八萬・・・」と記す
天保 6（1835）年	伊万里津から年間31万俵のやきものが全国に積み出される。伊万里津の陶器商家は80軒（『伊万里歳時記』）
万延元（1860）年	『伊万里津絵図』に白壁土蔵造の家と蔵が建ち並ぶ様子が描かれる
慶応 3（1867）年	パリ万国博覧会に伊万里焼（有田焼）が出品され、明治時代には海外への輸出が再び盛んになる
明治 4（1871）年	廃藩置県により佐賀藩は佐賀県になる
明治 5（1872）年	ふたたび佐賀県になり、県庁が佐賀に移る
明治 30（1897）年	門司・有田・佐世保間に九州鉄道が開通すると陶磁器は船よりも鉄道で運ぶことが次第に盛んになった。伊万里焼と呼ばれた肥前の磁器は、有田焼や伊万里焼、狭み焼き、三川内焼などの産地ごとの名前で呼ばれるようになった

（出所）伊万里市陶器商家資料館「伊万里津関係年表」『白壁』伊万里市陶器商家資料館だより、No.6（一部略）

は前代未聞の高額株」と明治 17 (1884) 年発行の佐賀新聞は報じている。以後大正 5 (1916) 年伊万里実業銀行・唐津銀行伊万里支店、大正 14 (1925) 年伊万里信用組合が生まれ、中小小工業者の金融体制が整備された (古賀 155)。単に陶磁器の売買における金融だけではなく、それ以外の分野においても金融の恩恵を浸透させようとした。

帆船に代わる蒸気船の「通船」は、明治 13 (1880) 年、伊万里町川窪永康・一番ヶ瀬富助の「通貨丸」に始まり、明治 22 (1889) 年には大阪商船 2 隻・大阪共同組 2 隻の他、関西汽船・深川汽船・尼ヶ崎汽船・鐘崎三本マスト機帆船など定期船が、近畿・中国・四国・北陸・壱岐・対馬・大島間を往復した。明治 33 (1900) 年伊万里港積出陶器は、31 万 8,000 俵・価格 74 万円に達したとされる (西松浦郡会輸出入調査票)。また明治 36 (1903) 年には朝鮮・満州向け陶器輸出が開始された。伊万里の陶器商柳ヶ瀬六助は大坪町金谷の登窯で、大川内村吉田の陶工大串音松に焼成させた「大音製」銘は忽ち満鮮官民の好評を得たという。大正期に入ると、六助は伊万里仕立の汽船安東丸により盛んに満鮮に向けて輸出したとされる (古賀 155)。こうした伊万里商人や伊万里を訪れた旅商人の旺盛な販売力が新市場を開拓し、維持しようとしたことがこの状況からわかる。表 3 は、伊万里津に関する年表である。表 1 よりも伊万里津が形成され、繁栄した経緯が詳しく示されている。

3 伊万里で活躍した商人

(1) 伊万里津からの積出

佐賀藩は「皿山 (有田) の陶器は産物として大坂その他にて売り渡しにあいなりそうろう」として重視した (有田赤江町法元寺文書)。売渡役は、伊万里商人及び伊万里へ船で来航した「旅商人」らであった。伊万里商人は、有田の窯焼 (窯元) から仕入れ、他国の旅商人へ販売し、これを旅商人が国内各地で販売した。有田の町人学者庄司孝祺の『儉約富強録』には、「今、紀州・筑前・其他四国・中国の旅商伊万里に来航し封内 (佐賀) より買入れ、俟他国 (大坂其他) にひさぎ、利金を自国に入れる」とある。つまり、「伊万里は商人の輻輳する津にて、焼造るばにはあらず」であった (伊万里市歴史民俗資料館 (1996) 1)。これは伊万里津という場所の性格を端的に表現しており、生産地ではなく、流通拠点 (起点) であったことがわかる。

『伊万里歳時記』の原本は 3 巻からなり、巻二に天保 6 (1835) 年 9 月頃、報告された「伊万里積出陶器荷高国分」「陶器旅客別当付下宿」および「当所陶器商人」の 3 つの調査結果がある (伊万里歳時記は明治 25~29 (1892~1896) 年頃に花嶋芳樹が編集した歴史民族誌)。ここでは幕末に近い時期の伊万里津からの焼物移出状況がわかる (伊万里市歴史民俗資料館 (1996) 1)。

<表 4 肥前藩、内外山陶器積出先（天保年間）>

数量（俵）	仕向国	数量（俵）	仕向国
1,000	筑前	1,600	伊勢
1,000	豊前	1,500	尾張
7,000	豊後	4,000	三河
2,000	日向	9,000	駿河
7,500	伊豫	110,000	關八州
5,000	讃岐	うち60,000	江戸
4,000	土佐	600	隠岐
3,000	阿波	4,000	因幡
7,000	長門	4,000	丹州
5,000	安芸	2,000	若狭
1,500	備後	5,500	越前
5,500	備中	5,000	越中
13,000	備前	9,000	越後
1,500	美作	2,500	加賀
3,500	播磨	1,500	仙台
2,500	摂津	6,000	出羽
36,000	大阪	2,000	秋田
1,000	大和	3,000	南部
5,000	紀伊	1,500	津軽
1,000	堺	500	松前
2,000	近江		
		310,000	合計

（出所）古賀 153-154（一部改）

表 4 をみると、肥前磁器の販売地域の特色やその背後の状況も読み取ることができよう。積出荷高の最多は江戸（19.2%弱）であり、大坂（11.5%弱）が続き、伊勢・備前がこれに次いでいた。江戸の分を差し引いた 5 万俵が關八州へ向けられ、大坂分には京都なども含まれていたようだ。瀬戸を有する尾張が 1,500 俵と少なく、この周辺には伊万里の入り込む余地はなかった（伊万里市歴史民俗資料館（1996）2）。それは瀬戸物といわれた「瀬戸焼」だけではなく、その周辺の陶磁器が多く流通していたためであろう。

またこれらの数字は、故国型と非故国型に分けられている。当該国あるいは地方の商人が伊万里で仕入れた焼物荷を故郷へ運搬し、そこで販売・消費される場合と他国へ移動させることを目的に積出しする場合である。奥羽から北陸・山陰にかけては故国型であり、伊予長門などは非故国型である。伊予 7,500 俵のうち、大半は同国の桜井浦の商人（漆器を販売）の扱った

荷物であり、これは京阪地方へ再移出され、長門 7,000 俵の多くは下関を経て、日本海方面に継いで送られた。その他、伊勢・備前なども後者に属する部分が含まれていたと推測できる（伊万里市歴史民俗資料館（1996）2-3）。こうした再移出先にも考えを巡らせると、旅商人の行動範囲の広さと取引相手の特色も理解できよう。

（2）諸国陶器商（旅商人）の活躍

先にもふれたように伊万里津には、伊万里商人と諸国で陶器を扱う旅商人が滞在していた。旅商人は、通常は伊万里に 1-6 ヶ月滞在し、注文品が焼成するのを待ち、荷を満載して出帆した。鍋島藩は伊万里に遊里を置かせなかったため、地元の伊万里商人は、国学・漢学・書画・和歌・俳諧など、商家の子女らは琴三味線舞踊などを修めて旅商人を接待した。天保 10（1839）年、筑前芦屋岡（おかめ）湊宮の灯籠に伊万里陶器商 49 名の銘が残っている。その子孫は、明治・大正期を通じて伊万里経済界の重要な構成要員となっている（古賀 154）。さらに学問を大切にするという鍋島藩の伝統は、廃藩置県後も中央政府などで活躍する人物を輩出したことから評価されている面もある。

旅商人山鹿治太郎は、その販路を越後今町（直江津）へ求めていた（寛政 6（1794）年 6 月、金 20 両集金）という記録が残っている。同じく旅商人芦屋六次郎からは、同地で伊万里商人前川善太郎の父善三郎が集金（金 10 両）し（同 6 年 6 月）、同年 5 月には越前三国で岐志金次郎から金 20 両を集金していた記録もある。同所には同じ頃、やはり旅商人柏原吉次郎が来ていた記録がある。また筑前商人の行商先も判明している。『天明 7（1787）年（以後）合力・施行・奉加控覚』には、前川家が筑前商人の仲介により、各地の寺社などへ奉加・貴信が書き留められている。その中に筑前商人の行商先をうかがわせるものもある（伊万里市歴史民俗資料館（1996）24）。

伊万里商人前川家史料『寛政元年伊勢参宮并西国三三所巡礼道中記』には前川善太郎一行 5 人が辿った様子が記述されている。伊勢詣を兼ねて一番札所的那智山青岸渡寺（和歌山県勝浦町）から三十三番札所谷汲山華厳寺（岐阜県谷汲村）まで観音霊場を巡礼する長旅（約 5 ヶ月）であったが、その日々の記事には伊万里焼の流通に直接関係する内容も含まれていた。その 1 つは大坂の焼物問屋に関する事、1 つは筑前商人との出会いであった（伊万里市歴史民俗資料館（1996）25-26）。

紀州商人は、伊万里で仕入れた陶磁器を販売するため、江戸や関東地方へ赴いたために「江戸通い」の名があった（『箕嶋町誌—たちばなの里（昭和 26（1951）年）』、『有田市史（昭和 49（1974）年）』）。特に箕嶋商人は「紀州有田郡宮崎商人」とも称した。その開始時期は不明であるが、最古のものは享保 6（1721）年の宮崎陶器商人直売差し止めの記録である。ここには、

(江戸町奉行所は)江戸廻船問屋紀伊國屋久兵衛を呼び出し、紀州から積み送りの焼物を御堂堀で販売したことに対し、江戸府内の同商売人の関係が悪くなるため、直売禁止を通達した。つまり、当時江戸における宮崎陶器商人が既に活動していたことがわかる(『箕嶋町史』231)。さらに宮崎陶器商人の取引は、当時の江戸府内における商人との取引を介さないものであり、それら商人からの申出もあったと考えられるが、当時江戸における商習慣に則って取引を行うこと求められたことを示すものである。

箕嶋商人が伊万里焼を販売するようになった時期は、「黒江産漆器販売のため九州方面に赴き、たまたま伊万里陶器の名声を知り、江戸で販売することに着想して始めたのが始まりで、寛文(1661~1672年)頃(有田市誌)」とされ、紀州藩江戸御蔵の役人を務めた閑樹園老人と称した人の慶応3(1867)年に記述によるものである(伊万里市歴史民俗資料館(1996)31-32)。

有田磁器の発祥から約半世紀が過ぎると、有田地方の陶業が急激に発展した。近世封建体制が比較的安定し、経済面では全国市場形成が進み、遠隔地間の商品流通が盛んになった。その少し後、佐賀領内で箕嶋商人の姿が見られるようになった。志久村肥前杵島郡の東部の村には六角川中流部の河港である志久津があった。当時、佐賀鍋島藩における多久家領の、いわゆる南目の村の1つであった。元禄5(1692)年10月に播州網干の米津弥山が入津した。こうした舟による経済交流が隆盛し、伊万里焼もこうした経路で交易されていた(伊万里市歴史民俗資料館(1996)32-33)。

享保6~8(1721~1723)年を境として箕嶋商人は、自由な取引から問屋を介するようになった。享保期の公儀権力による流通ないし価格等政策への影響があり、箕嶋商人は直売禁止とされ、江戸問屋や仲買らとの紛争に翻弄された(伊万里市歴史民俗資料館(1996)33)。天和から正徳の頃、江戸には霊岸(厳)島からかやば(茅場)町・日本橋・万町・常盤橋には多くの焼物問屋があった。その中で箱崎町の坂本三右衛門が紀州焼物商人の「瀬戸物」の荷受問屋となった。紀州商人に対する江戸問屋体制は、その後、箕嶋商人との間に紛争を生じながらも継続していた(伊万里市歴史民俗資料館(1996)33-34)。紛争を生じながらもということは、単に江戸での取引方法を箕嶋商人が受容しただけではなく、時には抵抗をし、新たな取引方法を提案したとみることできる。

箕嶋商人の江戸近国田舎である関八州の直売行商は、『箕嶋町史』『有田市誌』では福吉屋与七『諸国得居帳(慶応4(1868)年、明治元(1868)年)』により、その行商経路を追っている。この帳簿には、日光道中の千住では、武蔵屋由兵衛・和泉屋六右衛門・駿河屋五右衛門の得意先があり、次の草加への里程も記されている。この経路によると広い行商圈をもっていたことがわかる。これら行商人は、紀州藩御勘定所から下附された陶器方の鑑札を所持する必要があった。それは5寸に2寸8分の木札であり、表面に行商者名を記し、裏面に「紀州勘定所」名の

焼き印があった。これを漆革の袋に入れ腰に吊した。黒の漆革の表裏に朱色鮮やかな「紀州」
「陶器方」の文字を表していた。股引・脚絆・草鞋の扮装で見本の陶器を担ぎ、鑑査札を吊り
下げて行商に出た。道路が整備されるとこれらの見本は車に積み、先々で注文を受け、御蔵か
ら送り届けた（伊万里市歴史民俗資料館（1996）35-36）。つまり、簗島商人の行商は、決して
自由なものではなく、かなり制限をされていたものと見なすこともできよう。それではなぜ制
限されたのであろうか。

福吉屋与七の関東行商と同様、何十人も商人が行商の網の目を張り巡らせた。注目を引く
のが田舎売り経路であった。舟（船）橋から潮来までは判然としているが、その後は不明のま
まである。ただ1人上州大戸宿単屋があげられている。大戸宿（現在の群馬県吾妻郡吾妻町大
戸）は、かつて信州と関東地方との交通の要所としての宿場があり、関所も設けられていた。
中山道・北国街道の脇往還の宿場であった。福吉屋与七の行商経路も、関東地方を①銚子を目
指す上総経路、②水戸を目指す経路、③日光道中及び上州への経路、④中山道の経路、⑤東海
道（武相）経路に分かれていた。吉野屋も一挙に上総から上州まで行商したとは考えられない
ため、上州大戸宿への途中、1つの行商経路は推測できる。尾嶋屋茂右衛門の名前があるが、
これは群馬県尾島宿の商人であり、また国府田傳右衛門は、国府田（常陸国）の商人と推測さ
れる。いずれにしても、紀州商人の関東地方の「田舎売」の実績を窺わせるものである（伊万
里市歴史民俗資料館（1996）36-38）。これらからは、商人によりその行商経路が分かれており、
行商人がその経路を守ることによって、行商が行われていたことがわかる。それはほかの行商
人の販路を侵さないという面もあったのであろうか。

（3）伊万里商人の活躍

伊万里津あるいはその周辺に居住していた陶器商人の歴史も古い。寛永年間（1624~1643年）
頃には、柿右衛門に赤絵技術を伝えたとされる東島徳左衛門や岩永伝右衛門らが陶磁器を取り
扱っていたとされる。東島徳左衛門らが扱った陶磁器は、富村源兵衛などにより東シナ海を越
え、印度方面まで私貿易されていた（伊万里市陶器商家資料館 No.3）。

寛文6（1662）年になり、長崎の出島に国産品の陳列場が設けられた際には、伊万里津の陶
器商人らが関係した。17世紀末以降、出島のヨーロッパ向け陶磁器輸出に陰りが見えはじめる
と、伊万里津の陶器商人らは国内向けの陶磁器積出を本格化させた（伊万里市陶器商家資料館
No.3）。陶器販売で富を蓄積した商人らは、その余裕金で海辺を干拓、田地を造成、あるいは既
墾地を買得し、商人地主の地歩を固め、両替・酒造・唐物・諸国廻船・生鮮塩乾魚商などを手
がけ、幕末期には壱岐捕鯨に数万両の資金を投じ（前川家文書）、佐賀藩主御座船建造費に3,000
両を貸し付け（松尾和人家文書）ている（古賀154）。つまり、伊万里商人らは単に陶器の流通

だけではなく、多くの事業に対して関心を持ち、それが肥前の経済にも貢献した。

日本三大喧嘩祭りの1つ伊万里の「トンテントン祭」は、天保の大飢饉の後、世直し行事として枚方や八幡浜のけんか祭りをモデルとし、伊万里津の豪商らが創始したとされる（大河内三河正『戸渡島神社祭礼記』（古賀 154）。先にもあげたように伊万里の商家には、大坂をはじめ、全国各地の商人が買付に来て、注文商品を千石船に積んで帰るまで約半年滞在していた（伊万里市郷土研究会（2019）2）。また「伊万里まだら」という伊万里市に伝わる民謡がある。江戸時代に各地から伊万里津へ、焼物の買付に来た商人と伊万里商人との間で、商談の成立した手締めの席や、注文品を引き渡した後の宴席、あるいは新しく船の造り時などに歌われたといわれている祝い歌である（伊万里市陶器商家資料館 No.2）。こうして伊万里を中心として商人間での独特な文化が形成されていった。次に伊万里商人として、陶磁器販売により多くの財をなし、さまざまに影響した商人（商家）が数軒あった。ここでは数軒を取り上げ、商業活動と現在における意味を考えてみたい。

（4）前川家

『肥前陶器史考』に「前川焼」の1項がある（462-463）。寛政年間（1789~1801年）、伊万里江湖辻の前川善三郎は前川焼を販売していた。前川家は代々陶器商として有田青磁を取扱い、善三郎は学を好むとともに気韻に富み、自ら工夫した雛形で柿伊右衛門や有田の平林などで焼いたものは賞賛され、前川焼の名を博したとされる。同家史料には、焼物に施す絵や模様などの手本と思われる部類がある。これらはさきの「己が工夫せる雛形」に属するものである（伊万里市歴史民俗資料館（1996）12-13）。

前川家の商業記録「銀控帳」10冊には、天明3（1783）年から天保5（1834）年までの約50年間にわたる旅商人との取引が記されている。それは金銀貸借状況が主であり、取引対象物の数量は内容にまでは及んでいない。銀控帳開始の天明3（1783）年は、佐賀藩の流通統制（専売）の3段目にあたる明和仕法（大坂為替法仕法）が解かれ、自由市場の時期に入って15年が経過していた。既に同家では大坂問屋との取引を再開していた。天明の頃という疑問はあるとされるが、規制された中央市場を避け、地方「売場」に展開した船頭即商人の姿が「銀控帳」で追うことができる（伊万里市歴史民俗資料館（1996）13）。

年ごとの旅商人数は、天明3（1783）年は8人であったが、翌4（1784）年には84人、5（1785）年には100人にまで増えた。以後文化10（1813）年まで年平均80人であった（50~100人の幅がある）。その大多数が筑前商人であり、文化10（1813）年は100人との取引があり、筑前の他は石見・下松の2人のみであった。つまり筑前以外の旅商人は、対州・下関・萩・尾張・出雲・紀伊からは、1度のみあるいは1年、2、3年間隔で断続的あるいは1人の商人が連続して

(石見の叶屋嘉右衛門)とか、例外的ではないがごく少数である。文政元年に紀州から3人が来て、その1人唐津屋貞吉(文化11(1814)年、戸渡嶋社へ石手水鉢を寄進した1人)の場合、金10両相当の焼物を仕入れている(伊万里市歴史民俗資料館(1996)13)。

前川家「銀控帳」は、年ごとの取引状況を物語る焼物代金額と正金取替高を集計して作成している。これによると取引高の大きさから寛政5~8(1793~1796)年頃と文化2~6(1805~1809)年頃にピークがある。焼物代の最も多い文化2(1805)年には1,093貫目に達している。金でいうと約3,000両であった。そして寛政末から享和(1800~1802年頃)にかけて大きな谷間があった。その理由は、この間の銀控帳が欠けているため状況が不明なためである。また文化期後半に焼物取引高の急激な減少、そして文政になるとその記録が絶えてしまった。文化元(1804)年から増える正金取替は、文政に入った後も銀控帳が途絶えるまで続いた(伊万里市歴史民俗資料館(1996)15-16)。

前川家の衰退は、「不景気」による陶磁器市場の慢性的不況が理由であった。既に松尾調兵衛・彦兵衛寛永の借用証文・来状などからその影響がわかっている。旅商人からの来信には、代金返済遅滞について、不況の様相が克明にされていた。また筑前商人らが前川家との取引から離脱した状況の背後にも不況が影響したようである。慢性的不況の根本原因は、全般的な生産過剰であり、瀬戸・美濃焼などとの競合であった。しかしそれは、筑前など旅商人の商品は売れ残りや売掛の未収・放棄などとなり、彼らを苦況・破産などに追い込むことになった(伊万里市歴史民俗資料館(1996)23-24)。したがって、旅商人との取引は、波もあり、その取引は景気や他の産地との競合という複合的な理由により、影響を受けるものであった。それが前川家の事業にも多大な影響を与えた。

前川家は、伊万里の陶器商が多く軒を連ねた本下町に店舗を構えた。陶器商としての存在は18世紀前期の享保頃に遡ることができ、江戸中・後期にも一層盛んに業を営み、田畑山林や家屋敷なども拡張していった。5代目善三郎(廣富)、6代目善太郎(富道、後善左衛門に改名)の頃が同家の陶商としての盛期であった。銀控帳における記録の大半は筑前陶器商人によって占められている。一人ひとりの商人が自己責任の下、遠くへ旅行して、ほぼ1年1回前川家との取引を重ねていく姿を教えている(伊万里市歴史民俗資料館(1996)53)。また、特定地域や特定商人に偏った取引が前川家を苦境に追い込んだともいえよう。ここでは取引相手の集中化を回避する必要性も教えてくれる。

(5) 松尾家

松尾家は、伊万里の有田町(現元町)に店舗を構え、伊万里の陶器商人の中でも最有力の部類に属した。文政(1818~1831年)の頃、佐賀藩は藩主の御召船春日丸など造船に際し、領内

の富商に献金を命じたところ、同家は金 1,300 両他を献納した。現在、同家には陶商史料として古文書類と「手頭」（商品見本）が保存されている。古文書類は、筑前・紀州の旅商人などの借用証文や書状、有田皿山関係の借用証文類その他、藤津郡志田山関係の証文類その他に区分される。同家も前川家と同様、筑前商人を取引相手とすることが多かったようだ。同家の関係証文類は、書状を含めて 82 通である。うち同家 3 代長兵衛（本名は調兵衛）関係分の証文 37 通の内、紀州のものは 1 通、4 代彦兵衛関係分 37 通のうち、紀州 1、伊予桜井 1、書状 8 通はすべて筑前商人からであった（伊万里市歴史民俗資料館（1996）7）。

借用証文からは松尾家の経営がわかる。これらの証文に記された松尾家からの借用金の性格である。多くは同家からの焼物買入代金であったが、中には他の伊万里陶器商から買入のための借用もあった。筑前脇浦の泉屋平次郎は、文政 11（1828）年に正金 25 両・焼物代 30 両 5 号余を 1 割半の高利で借用していた。しかしこの年の旅行中、「難風に付加々（加賀）沖にて荷折」した。返済できないまま年月が過ぎ、所持していた田畑の売却代金で辛うじて金 8 両 2 歩余を返していたが、残金は元利 120 両余もあった。これを明後年には必ず返済すると約定した手形 1 札を差し入れたのは天保 6（1835）年である（のちに天保 11（1840）年にはさらに翌春迄の猶予を願っていた）であった（伊万里市歴史民俗資料館（1996）7-8）。焼物代としての借用と同時に正金を借用した場合、その用途は他の商人から仕入れる「元手」であり、焼物代とは明記しない場合の多くはそれであった可能性があるとされる（伊万里市歴史民俗資料館（1996）9）。したがって、ここからは松尾家は単に商品を掛売りしていただけでなく、金融業をしていたということが読み取れよう。

焼物代と明記した場合は、もちろん松尾家からの焼物仕入代金であり、利息付であった。現金仕切ではなく、仕入れた焼物を各地で販売し、その売上で返済する借金であった（伊万里市歴史民俗資料館（1996）9）。焼物代にも 1 割半の高い利息が付けられた。自己の貸金返済要求のため、「当御借し下さるべく」はおかしいが、これがこの当時の表現であったようだ（伊万里市歴史民俗資料館（1996）9-10）。

さらに有田南川原（旧曲川村）の柿右衛門家文書には松尾彦左衛門らに宛てた 1 通の借用証文が残っている。借金した正金 20 両は直ちに藩当局から「釜焼中御拝借納金」へ振り向けられるべきであったが、彦左衛門らへの返済は下南川原登に火入れし、完成した焼物によることを約束した。これは柿右衛門個人の借用ではなく、下南川原登の釜焼職人全体のものであったようだ。これらは酒井田柿右衛門家と松尾家との間に焼物を媒介とした関係の存在を示す文書である（伊万里市歴史民俗資料館（1996）10）。つまり、松尾家による窯焼職人への融資といえよう。したがって、販売先である旅商人に対する金融だけではなく、生産段階である窯焼き職人への融資も見られることから金融商人としての松尾家の姿も浮上することになる。これらは次

の状況からもよく理解できる。

松尾家と皿山釜焼のとの関係は、柿右衛門だけではなく、天保4（1833）年の下南川原山立林源次郎の正金20両2歩の借用証文は、抵当として釜沽券ならびに釜焼札・同付札4枚を差し入れるとした。釜沽券は釜の所有権を示す証券であった。釜焼札（名代札）は、釜焼きの営業鑑札であり、必ず水碓通札・底取札・細工札・絵書札の4枚が付属していた。抵当物件には、土地・建物が建てられ、また釜焼は生命の綱である釜を当てることもあった。さらに藤津郡志田山関係の文書が約50通ある。この地の釜焼に対する金銭貸付が多かった。蓮池藩と陶器方との関係もあった。松尾家は、志田西山と同様、同東山の再建にも、釜焼きに対する資金の貸付を通じて参画している。そこでは釜焼救済のための「御上」の格別の仕組みが、関係商人との貸付となった（伊万里市歴史民俗資料館（1996）10-11）。

松尾貞吉は、天保10（1839）年、伊万里町で佐賀藩の藩札を取り扱う両替商の「札場」に生まれた。明治4（1871）年から明治6（1873）年まで明治政府の貨幣切替の「掛屋」に任命され、伊万里や佐賀で業務に従事した。明治10（1877）年、上海へ渡航、帰国後は上海の商社から石油や洋灯等を輸入し、上海で習得した鑄鉄技術を生かして、鉄工場を設立した（伊万里市郷土研究会（2019）35）。貞吉は、近代的経済活動の推進役が銀行と悟り、明治13（1880）年、伊万里町の豪商石丸源左衛門と講会主人となり、講に加入した伊万里町有志53人の世話をした。また石丸源左衛門と上京、鍋島家や大隈重信など旧佐賀藩出身者を伊万里銀行の株主とするために奔走した。そして、伊万里銀行設立の際には、発起人の1人となり、最初は副頭取、明治16（1883）年から翌年まで初代頭取、明治22（1889）年から明治23（1890）年まで第3代頭取に就任した。特に在任中は波佐見一有田一伊万里間の道路を整備して焼物を運びやすくし、伊万里一南波多水留間の道路を整備した。また伊万里町を南北に貫く伊万里停車場通り（現在の駅通り）の開通のため、土地など多額の寄付をした。さらに明治19（1886）年、石丸源左衛門他6人との発起で西松浦郡伊万里鉄道会を立ち上げ、明治31（1898）年の伊万里鉄道開業に繋がった（伊万里市郷土研究会（2019）35）。こうして松尾家は代々、単なる卸売商人ではなく、地域経済に大きな影響を与えた経済人としての位置づけを与えることができよう。

（6）犬塚家

18世紀を代表した伊万里津の豪商は先に取り上げた前川善左衛門であった。「天下の台所」と呼ばれ、国内最大の物資集散地大坂を中心に自船で陶磁器を積み出した。19世紀には、犬塚伊左衛門や石丸源左衛門、松尾彦兵衛、武富七太郎といった陶器商人らが現れ、江戸や大坂を中心に全国に陶磁器を流通させた（伊万里市陶器商家資料館 No.3）。

犬塚家の祖先は、筑前国姪ノ浜（福岡市）から東山代村（伊万里市東山代町）の長浜へ塩づ

くりの指導に來た千葉氏家臣であり、元禄年間（1688~1703年）に教法寺（伊万里市西円蔵寺）を開基した千葉祐玄とともに伊万里町へ移った。教法寺の墓碑銘には初代が犬塚與次右衛門（よじうえもん）と刻まれている（伊万里市陶器商家資料館 No.5）。

陶器商は3代與次右衛門が明和元（1764）年頃に始めた。旧犬塚家住宅は、文政8（1825）年頃建てられ、4代伊左衛門の晩年であった。明治25（1892）年成立の『伊万里歳時記』巻二「陶器商人（之）事」に、先の表2で取り上げた伊万里の陶器商人80人のなかに本下町「伊左エ門」の名がある。これは5代伊左衛門盛富である（伊万里市陶器商家資料館 No.5）。犬塚家は創業明和元（1764）年頃と伝えられる。伊万里津屈指の陶器商として丸駒（駒に丸）の商号で大阪や江戸へ陶磁器を積み出した（伊万里市陶器商家資料館資料）。ここでは商号を使用し、積み出したことが特徴である。それは生産者がその名を入れることはあったが、陶器商人（流通業者）が商号を継続利用するのはそれほど一般的ではなかったためである。

江戸は、江戸時代後期に人口120万人に達し、わが国の消費中心地であった。そこで犬塚家は、伊万里津の間屋仲間から大量に陶磁器を仕入れ、主に江戸へ積み出した。犬塚家には帳簿類中心に古文書が残っている。天保13（1842）年の『江戸積荷根居帳（つみにねずえちょう）』には、江戸向けの陶磁器積出高が記録されている。その上方にはすべて丸駒の印が捺されていた。また犬塚伊左衛門盛富の弟、犬塚駒吉盛賢は、江戸陶器蔵元となって販売拡大に尽力した。犬塚家は日本橋蛸殻町に店舗を構え、関東一円から東北地方を商圈とした。駒吉は嘉永5（1852）年に深川で江戸陶器蔵元となった。犬塚家の江戸向け商売が軌道に乗り、主力となると犬塚家＝丸駒のイメージが一般に浸透し、同家も積極的に自家のブランド（商標・商号・家印）として宣伝した。また島根県浜田市外ノ浦の清水屋『諸国御客御船帳（しょこくおきゃくおぶねちょう）』には、肥前国の部に慶応3（1867）年3月に「伊万里津 丸駒屋 勝助（6代目犬塚伊左衛門盛全）様」と記され、屋号のように使用されていたことがわかる（伊万里市陶器商家資料館 No.4）。

犬塚家における「丸駒」の由来には伝説がある。安政2（1855）年犬塚伊左衛門盛全による『馬角の由来』、安政4（1857）年高松大膳権太夫保實卿（たかまつだいぜんごんだゆうやすざねきょう）（京都の公家）による『馬角の来由』、安政5（1858）年瓢庵和来（ひさごあんわらい）（伊万里津の俳人）による『馬角の来由副翰（ふくかん）1（仮題）』さらに半升庵鼎山（はんしょうあんていざん）（伊万里津の俳人）による『馬角の来由副翰2（仮題）』の計4通の文書が残っている。それらは同家の「馬角」に重みを与えるための解説書であった。『馬角の来由副翰（ふくかん）1（仮題）』の内容は、牧島で飼われていた白馬に角が生えてきたのをとった「馬角」が同家の家宝として伝わり、「丸駒」の印はこの角に由来するという。ギリシア神話のユニコーン伝説の東洋版のようではあるが、4通の文書のうち、これしか「馬角」と「丸駒」を

結びつけていない。実際には、家宝である「馬角」に重みを付ける過程で荷印から家印になった「丸駒」にも箔を付けようと、不思議な伝説が牽強付会されたものともされている。これはブランド化を狙った同家の現代的な商感覚を知ることができる。その後、同家の子孫は、佐賀県有田町で陶器商を営んだ。ただ○(まる)は転ぶので、商家の家印には縁起が悪いため、角駒に家印を変更した(伊万里市陶器商家資料館 No.4)。このようなところに商家の縁かつぎを垣間見ることできる。

天保7(1836)年の犬塚家『金銀勘定帳』には、取引相手では大坂の間屋加嶋屋万兵衛や大根屋忠右衛門の名があり、大坂へも荷を積み出していたことがわかる。また福岡県遠賀郡芦屋町の神武天皇神社の天保10(1839)年建立の石灯籠には、寄進者の伊万里商人73名の中に「犬塚伊左エ門」の名があり、筑前商人とのつながりもあったことがわかる(伊万里市陶器商家資料館 No.5)。これまで取り上げてきた伊万里商人は、旅商人としての筑前商人との関係の深さが感じられる。

安政5(1858)年の古文書には「乾栄丸勝助船」「栄宝丸勝助船」の記載があり、犬塚家は2艘の自船で荷を積み出していた。勝助は、後の6代伊左衛門盛全(もりまた)である。積荷は一旦は兵庫の肥前屋粘右衛門の元へ届けられ、そこから江戸の駒吉の元へ運ばれていた。文久3(1863)年の古文書には、伊万里から大坂など遠隔地へ荷を運ぶ遠国船頭約70名の名があった。そのうち焼物を2千俵以上積み出している船頭は7人だけであり、伊万里の船頭では勝助しか記載されていない。同家の商いの大きさがわかる。慶応2(1866)年の『船方勘定帳』では「栄寿丸」・「宮福丸」を加えて計4艘の持ち船をもっている。ただし、この2艘は主に石炭の積出に使われていた(伊万里市陶器商家資料館 No.5)。したがって、この頃には陶磁器販売以外にも事業を拡大させていたことがわかる。

犬塚家の経営の特殊性は、伊万里町の陶器商人から大量の商品を仕入れ、主として江戸へ積み出せる点にあった。それは「陶器仕入所」という印判がそれを物語っている(伊万里市歴史民俗資料館(1996)59)。同家の繁栄は、藩の陶器販売統制の中で特権を与えられ、伊万里の仕入元の伊左衛門と船頭(輸送の責任者)の勝助、江戸販売元の駒吉という一族による一貫した経営体制にあったとされる。しかし、明治4(1871)年の廃藩置県で同家は藩からの特権を失うことになった(伊万里市陶器商家資料館 No.5)。

大阪商船会社伊万里代理店の明治26(1893)年の『積荷根居帳』には、犬塚伊三郎取扱の荷受者として、大坂の田中安兵衛・山本直十郎、兵庫の堺谷孫右エ門、神戸の馬渡儀郎(まだらよしろう)、多度津(香川県)の宮崎平次郎の名前があり、幅広い取引を続けていたようだ。しかし、明治31(1898)年に伊万里鉄道が開通すると伊万里港は次第に使われなくなり、海運を主力としていた同家は打撃を受けた。大正4-5(1915~1916)年頃、陶器商を継いだ犬塚長作は、

<写真4 旧犬塚家外観 (筆者撮影)>



<写真5 旧犬塚家内部 (筆者撮影)>



鉄道輸送の利便性を考え有田町に移り、屋号を角駒に改めた(伊万里市陶器商家資料館 No.5)。まさに物流が大きく変化する中、その変化を的確に捉えられなかった側面も垣間見ることができよう。

旧犬塚家住宅¹⁾は、昭和 63 (1988) 年、7 代目当主犬塚伊三郎の姪にあたる故吉永タキにより伊万里市に寄贈された。伊万里独特の町並みを形作った土蔵造の町家の多くが近代化の波に晒され失われたため、犬塚家の重要性を考え、伊万里市は 1990 年から修理復元をし、1991 年 7 月に「伊万里市陶器商家資料館」として整備公開した(伊万里市陶器商家資料館資料、伊万里市郷土研究会 (2019) 2)。

(7) 株仲間から香蘭社設立

近世の有田には、株仲間と呼ばれる営業特権を持った同業者組織が存在した。公権力で所有権が十分に保護されない社会では、株仲間は権益擁護、調整、信用保持機能を果たしていた。規約には、仲間の商人が他商人から不正をされた場合、仲間の商人全員が不正を働いた商人と取引を停止する約束があった。王政復古による生産解放令は、生産を自由化したため、株仲間を解散させ、新たな窯元や赤絵屋の参入を許した。参入者の多くは小規模な零細業者であった。そのため、競争激化は粗製乱造を招き、窯元の技術を劣化させ、困窮に追い込んだ。結局、明治維新の劇的変化による産地自由化は、窯元の過当競争と粗製乱造が表面化し、陶磁器積出集積地としての地理的利点と豊富な資金力を背景に台頭した伊万里商人資本が零細窯元を支配、有田皿山の技術低下と窯元の困窮化を生じさせた。一旦は藩主導で佐賀藩と有田皿山陶磁器従業者の出資で伊万里商社を設立し、伊万里商人 70 余名の販売権剥奪と有田皿山の窯焼・商人の囲い込んだ。しかし、伊万里商人の出資拒絶により、零細な窯元は遠隔の消費地における資金回収の長いタイムラグに対応できず、再び伊万里商人の台頭を許した。明治維新は、過当競争

から有田を保護してきた仕組みと物流・金融システムを崩壊させた。こうした危機に直面し、近世の有田皿山の中心的な陶業家出身者には個人経営では事業の発展は難しいと考える者が現れた。彼らが中核となり、佐賀の乱の翌年である明治8（1875）年に資本金4万8千円で合本組織香蘭社（前期香蘭社）が有田皿山関係者を社員として設立した（山田（2013）225）。

前期香蘭社設立は、8代目深川栄左衛門、手塚亀之助、辻常明、深海墨之助が中心となった。社長深川栄左衛門は有田の有力窯元当主、深海墨之助と同様に有田皿山の名窯と呼ばれた窯元継嗣であった。深川家は佐賀藩との緊密な関係を活かし、産地発展と軌を一に成長した。7代目深川栄左衛門は、江戸末期に古伊万里を中心に製品開発を手がけた先々代の事業を承継し、藩の陶磁器流通政策に協力し、江戸や大坂に止まらず、全国の主要都市へ伊万里商人を經由せずに大量販売する流通経路を独自に構築しようとした。こうした流通は近世の流通を大きく変化させた。近世になると香蘭社は、明治政府を後ろ盾とし、有田皿山の正統性のある陶業者の活動で設立された。会社設立に関する法制が未整備であったため、内務卿大久保利通は香蘭社設立の出願に対し、香蘭社則は「人民相互の合意事項であると心得よ」とした。そこで香蘭社は、会社制度を利用した有田の陶業者による協働の仕組みとして誕生した（山田（2013）225）。つまり、前期香蘭社は、製販が分離していた近世の陶磁器流通を大きく変化させる試みであった。ただ、200年以上継続してきた流通システムは簡単に変化させることができない難しさもあった。

4 流通補助機能の発達

(1) 陶磁器の包装

有田・伊万里地区では、稲藁を材料とした陶磁器包装が発達し、継承されてきた。藁荷造の伝統的包装技術の形態は2タイプに集約される。それが「菰包み」と「輪巻き」である。菰包みは、小型陶磁器をほぼ円筒状に仕上げる包装方法であり、多様な器種に対応できた。その特徴は、内包装と外包装からなる二重性である。円筒形俵型の荷造りは、藁の弾力で衝撃に強く、多少の横投げにも十分耐えられた。菰包みを総体として、造形要素を捉えると、①カラゲ、②菰巻きに分類できる（宮木・石村（2001）147）。

①カラゲは、菰巻きの前工程の内包装であり、包装の加工方法と加工された状態の呼称である。これは多数の小型製品をツツ状にし、縄で結束しユニットが完成した。②菰巻きは、菰包みの外包装である。菰の上に大量の藁を敷き詰めて分厚い藁床を造り、内包装のユニットを中心にし、藁ごと菰で巻き込み、縦横に縄掛けして完成した。菰包みは、横に転がせ、荷積は横方向に積むことができた。荷役作業の際にも、横方向に取り扱われた。菰包みの重量は、上限

30kgを目安に1単位として俵で数えられた。1俵の容量は、陶磁器の種類や大小で梱包数がほぼ決まり、入数規定と呼ばれた。入数規定は古くから伝わる荷造りのシステムであった（宮木・石村（2001）147-148）。

他方、輪巻きは高級品や荒物など大型製品対象であり、菰包みに適さないものに対応した。藁の性質を生かした荷造技術により、加工過程で縄掛け技術を基盤とした。包装構造が堅牢であり、「取扱注意」を喚起するシースルー包装であり、包装加工は規格化され、太縄の太さや使用本数は、製品の品質、重量、搬出距離の遠近等で荷師が柔軟に調整できた。荷は縦置き・縦積とした。有田・伊万里地区には、陶磁器の藁包装技術の成立やその発達を裏付ける近世の文献・図像資料はない。また、流通包装であり、現物の存在も確認できない。しかし、陶磁器以外では俵タイプの包装が近世以前に存在している。わが国の藁包装は、生活で使われていた器物形状はおおよそ想像できる（宮木・石村（2001）148-151）。

<表 6 絵画資料における藁包装の版類>

	名称	形態	機能
包装	俵（荷俵）	藁などで造る荷俵、袋 米、穀物、芋類、食銭湯の包装容器、紡錘形、円筒形	採集、保存、運搬機能 生産物の包装、収納機能、芋、塩、炭、塩乾物の容器 量を数える単位
	苞（藁包）	藁などを束ねて両端を縛り、その中に食品を包む 紡錘形、円錐形、縄袋 小型の包装	食料の移動容器 作業、保存容器 産物の土産 供膳用、料理容器
	菰・葎（敷物）	縄を経、稲藁を緯として製縫した葎、包み物 藁の容器、乾燥用具、敷物 吹、ふご、藁縄	巻く、包む、庇護用具 雨、風、ホコリからの程 落下防止、乾燥用具、敷物 包装材、運搬、収納用具
	縄	藁を綯った藁ひも、縄？ 藁縄、荷縄、背負い縄 縄袋、モッコ、縄籠	編む、縛る、絡げ、結束 梱包、運搬、牽引（引綱） 包装材

（出所）宮木・石村（2001）151頁（一部改）

藁包装の発達過程における俵タイプの進展においては、菰包みは形態的に円筒形タイプであった。菰包みの形態との関連性では、穀物以外の包装には、筒状の苞俵や苞包みなどがあった。有田・伊万里の菰包みは円筒形俵タイプが類似性が高い。さらに内包装がシステム化され、

海上輸送する陶磁器専用の産業包装技術として発展したようだ。内部の製品個装にはツトカラゲを用い、菰巻きの外包装で堅固な包装として成立した陶磁器包装は、伝統の在来技術と円筒形状タイプを基盤とした。輪巻き形態の造形要素は、カラゲ、太縄、縄掛けからなり、太縄には格別な意匠性があった（宮木・石村（2001）152-153）。

輪巻きの意匠は、近世に海上輸送で発展した樽文化との接点があり、陶磁器の海上輸送用梱包として開発されたようだ。酒樽は廻船で江戸に輸送された。酒樽の菰包みには商品を保護機能と銘柄表示という商業的要素があった。酒樽は貴重な酒を取り扱うため、海上輸送を重視して大量輸送を背景に桶・樽の規格化による量産が行われた（宮木・石村（2001）155）。酒樽における銘柄表示は現在も変わらず継続しており、それがブランドとして顧客の心象に刻まれることもある。

伊万里から積み出された陶磁器は、大坂・江戸を中心に取引された。有田・伊万里焼の供給も海上輸送によった。有田・伊万里地区での陶磁器包装は、格別な物を除き、高価な磁器から甕のような陶器製品まで等級格付もなく同様に厳重に包装された。藁荷造は、有田・伊万里で進展した独自産業技術として、荷造の専門職、荷師集団に継承された。磁器文化が陶器の甕にも及び、陶磁器の大量需要に対し藁荷造は定型化された作業工程で統一的行われた（宮木・石村（2001）155）。物流作業での分業の発達も見るができる。

菰包みは有田・伊万里独特のようであるが、意匠は藁包装の形態を基盤とし、円筒形俵タイプの類型として発展した。包装技術では、近世以前に先行する俵、苞、菰、縄等の技術を複合し、海上運搬を主体とする小型陶磁器専用藁荷造として定着した可能性が高い。輪巻きはわが国の縄文化の1つであり、造形要素である「太縄」の格別な意匠に特徴がある。意匠の独自性は、大型陶磁器を対象として遠距離海上輸送における保護機能を優先して発展したようだ。絵画資料にある藁包装には、輪巻きタイプの類型はなく、直接的な手掛かりはないが、国内的視野で見れば、輪巻きの「輪」の固有な呼称と、陶磁器包装に見る樽掛けの縄の事例などを手掛かりとし、近世では酒の海上輸送用容器として発展した酒樽の藁の意匠や樽かけ縄の技術との連関が類推されるようだ（宮木・石村（2001）155-156）。

近世以降、藁荷造は専門職の荷師が行った。これらは保護機能を優先しながらも、他産地に比べ美的な藁荷造として仕上げられ、伊万里を拠点に陸上・海上輸送において長距離輸送用包装として発達した（宮木（2005）57）。磁器輸送は、包装技術の進化とも重なり、船舶輸送では危険が発生する中、より安全な輸送実現のための技術として発達した。そこには単なる安全性の担保だけではなく、荷姿の美しさという要素も付け加えられていた。

(2) 伊万里銀行の設立

明治政府は、明治5(1872)年に国立銀行条例を公布し、銀行設立を奨励した。国立という名称ではあったが、実質は民間出資であった。政府は、明治9(1876)年8月に国立銀行条例を改正し、国立銀行設立が容易になり、各地で設立が相次いだ。明治12(1879)年末には設立数が153行に達し、乱立防止のため、その後設立が停止された。条例改正では銀行名使用の制限が削除され、それまで紙幣発行以外は国立銀行とほぼ同様の業務を遂行していた「銀行類似会社」と呼ばれた民間金融会社にも私立銀行設立の道が開かれた(伊万里市郷土研究会(2019)8)。こうした機会を伊万里の商人らが捉えていった。

佐賀県内では、小城第九十七国立銀行が明治12(1879)年3月に開業し、次いで佐賀第百六国立銀行が同年4月に開業した。両行は旧小城藩主や旧佐賀藩主が旧家臣の救済授産を目的とした士族銀行であった。取引層も士族中心であり、産業振興と商工業発展を達するには至らなかった。銀行類似会社から私立銀行となった三井銀行は、明治11(1878)年に佐賀出張店を開設したが、佐賀第百六国立銀行が明治12(1879)年4月に佐賀で開業したことによる競合回避のため、同年12月に佐賀出張店を伊万里町の中下町2133番地に移して伊万里出張店とした(伊万里市郷土研究会(2019)8)。

これまで取り上げてきたように近世の伊万里は、焼物取引が地域経済の中心であった。明治以降も伊万里港から全国へ積み出される物資と入荷物資の集散地であった。遠方との取引には手形や為替など信用取引が必要であり、それを見込んだ三井銀行が伊万里出張店を開設した。三井銀行伊万里支店は繁盛したため、伊万里商人の間にも地元銀行設立機運が高まった。明治15(1882)年3月、松尾貞吉や石丸源左衛門²⁾、藤田與兵衛³⁾、武富榮助、石丸源吉、武富熊助⁴⁾、中村勘兵衛、重松英一、犬塚源次郎、本岡儀八⁵⁾、有田町の深川熒左衛門11人の発起により、伊万里銀行が設立された。佐賀県内では最初の私立銀行の誕生であった。開業前に三井銀行伊万里出張所から業務譲渡を受けた。資本金37万円(約28億円)で、鍋島家や大隈重信からの出資も受けた。伊万里銀行の株主131人のうち86人が西松浦郡内の者であり、西松浦郡内の資金力の高さを表した。その後伊万里銀行は、合併や経営統合などを経て、佐賀興業銀行となり、佐賀中央銀行と合併して現在の佐賀銀行となった(伊万里市郷土研究会(2019)9)。こうして伊万里における近代の銀行設立は、これまで伊万里商人が中心となって行ってきた金融を専門金融機関の設立として具現化した。

(3) 伊万里鉄道の敷設

伊万里地方で最初に鉄道が開通したのは、伊万里一有田間であった。鉄道開通以前は、乗り物は船舶か人力車程度であった。明治15(1882)年、山崎文左衛門⁶⁾は私財を投じ伊万里町西

南の湿地を埋め立て、現在の伊万里駅北側に山崎町を造成した。さらに明治 17 (1884) 年 3 月、文左衛門は伊万里町有志の本岡市三郎、本岡佐吉、森永虎蔵、中村千代松らと相生橋を架橋した。そして後年の伊万里駅から相生橋までを南北に結ぶ停車場通りが完成した。九州での鉄道は明治 28 (1895) 年に門司－武雄間、明治 30 (1897) 年は有田を通して、早岐、佐世保まで開通した。これにより、伊万里が陸の孤島化することを怖れた本岡儀八、田中藤蔵⁷⁾、藤田與兵衛ら伊万里銀行の役員は、地元の豪商や、沿線の有志と協力して有田から伊万里まで線路を延長しようとした (伊万里市郷土研究会 (2019) 10)。これは伊万里という地域の経済的危機を感じたところから発せられたものといえる。

そこで西松浦郡内の有志 20 名は、明治 28 (1895) 年資本金 30 万円の伊万里鉄道株式会社を創立し、明治 29 (1896) 年 5 月、資本金 27 万円 (約 20 億円) で伊万里鉄道株式会社ができ、社長に田中藤蔵、取締役の中村千代松、松尾寛三、柳ヶ瀬六次、一番ヶ瀬國輔⁸⁾ が就任し、翌 2 月に起工式が行われ工事に取掛かかった。明治 31 (1898) 年 3 月にアメリカ製蒸気機関車を導入し、資本不足で資本金を 40 万円 (約 30 億円) に増資した。資本の多くは伊万里銀行の出資によるものであった。明治 31 (1898) 年 7 月、工事が完成し、新造客車 3 両、貨車 2 両の混合列車が伊万里－有田間を試運転した。そして翌月、伊万里－有田間が正式に開通した。停車場は伊万里、夫婦石、蔵宿、有田であった。こうして伊万里鉄道は開通したが、その経営は難しく、明治 31 (1898) 年 12 月には九州鉄道株式会社へ譲渡された。早くも大量輸送可能な鉄道は、近代のわが国を象徴する乗り物となり、大正 8 (1919) 年の伊万里駅の年間乗降客数は 37 万人に達した (伊万里市郷土研究会 (2019) 10)。他方で、焼物は船舶輸送よりも鉄道輸送が増えていくこととなった。そのため西肥前一带の磁器は、積出港の名前ではなく、有田町で焼かれた「有田焼」や伊万里市大川内町で焼かれた「伊万里焼」のように、次第に各産地の名前で呼ばれるようになった (伊万里市教育委員会 (2002) 38)。

九州鉄道の国有化・全国鉄道網の整備・列車運転回数増加により、有田内外山の陶器は有田駅から直接消費地への鉄道輸送量の増加に反比例し、伊万里港からの輸送は次第に減少した。陶器商の多くは有田・三河内などに移転や転職した。昭和 2 (1927) 年発行の『伊万里案内』では、伊万里の陶器商は上の 19 軒、明治初期の 5 分の 1 に減少したことを示している (古賀 156)。

伊万里－有田間の鉄道開通は、伊万里港背後の陶器・海産物・石炭その他の生産物資を国内外に輸送するためであった。明治 29 (1896) 年に伊万里の豪商中村千代松・西喜左衛門・武富源三郎による「伊万里を開港外貿易港たらしめる私議」は、陶器・石灰・煎海鼠など、伊万里港から輸出されている背後生産物資の長崎までの加重な輸送費などをあげ、特殊貿易港指定の必要性を指摘した。特殊貿易港指定運動は数年に亘り西松浦郡・平戸など伊万里湾岸町村が主体となって政府・両院議員などに対して続けられた。しかし、規定貿易港長崎・唐津に近く

実現しなかった。当時、伊万里港の輸出高は、51万812円、輸入高は380万7,090円であった（同指定建議書・請願書）。当時西松浦郡内の石炭生産高は1万5,000トン、山代・東山代・二里・大山・牧島・大川島の町村で大小20余りの炭礦が稼働していた（古賀155-156）。こうした再び伊万里港に光を当てようとする活動は、近隣の港湾整備が進められただけでなく、その港に対する戦略的意図も影響することとなった。そのため、伊万里港がかつてのような光を取り戻すことは叶わなくなった。

おわりに

本稿は、2020年2月25日から2月29日に実施された社会科学研究所春季実態調査において、かつて鍋島藩が藩窯を置いた大川内山、伊万里市街、佐賀県陶磁器工業組合、泉山磁石場、そして佐賀県立九州陶磁文化館を訪問し、陶磁器の歴史性とその魅力にひかれたことをきっかけとして執筆に至った。

九州の文化は、大陸からの影響を強く受けていることが多いが、磁器についてもその影響というよりも、大陸からわが国へと渡った陶工によって肥前の磁器文化が開始され、開花したといえる。また、それらの磁器を海外だけではなく、国内の津々浦々に運搬し、販売した商人の活動は、現在のように交通機関が発達していた社会ではなく、海上運搬には大きな困難があったことが想像に難くない。さらに伊万里商人と各地の旅商人が伊万里を訪問し、注文した磁器の焼成を待たために滞在し、それを各地に磁器を拡散させた商人の活動には、包装技術の発達やさまざまな金融活動の源流を観察することができる。

近代となり廃藩置県が断行され、それ以前の強い藩の影響がなくなり、陶磁器産地としての存立が危ぶまれた状況において、陶磁器販売によって得た経済的成果を商家のものだけとしなかった商人の姿も観察することができる。そして伊万里の商人らは新たな地域の繁栄へと繋ぐため、銀行設立や鉄道敷設に多くの世話人として加わり、また銀行設立後は役員としてその運営に多大な力を注いだことは近代においても「三方よし」を旨とした商人魂を見せつけられた思いがする。一方、豪商として一時隆盛を極めた商家では、近世から近代への変化の中において社会情勢の変化により衰退した商人家もあった。製造業としての作家や窯元においては家族（親子）間での技術伝承は確認され、しばしばその伝承の重要性が指摘されるが、商人家族がファミリービジネスとして継続するための知識移転はそこには製造業と同様に存在するのであろうか。商人家族が継続するための知識移転については、稿を改めて考察したい。

<引用・参考文献>

- 有田町史編纂委員会（1985）『有田町史 陶業編Ⅰ・Ⅱ』有田町
『犬塚家文書』伊万里市教育委員会所蔵
- 伊万里市観光協会ほか「旅 伊万里」パンフレット、1-23 頁
- 伊万里市教育委員会（2002）『伊万里市の文化財—ふるさとの風土と歴史を知る宝物—』伊万里
市教育委員会
- 伊万里市郷土研究会（2019）『明治維新 150 年記念 幕末・明治と伊万里の人』伊万里市教育委
員会
- 伊万里市史編さん委員会編（2007）『伊万里市史（近代・近世編）』伊万里市
- 伊万里市歴史民俗資料館（1996）『伊万里の陶器商人』伊万里市歴史民俗資料館
- 伊万里氏歴史民俗資料館（2000）『平成 12 年度特別企画展—20 世紀の思い出— 写真が語るあ
の頃の伊万里』伊万里氏歴史民俗資料館
- 伊万里市陶器商家資料館「セラミックロード～古伊万里のヨーロッパ向け輸出～」『白壁』伊万里
市陶器商家資料館だより、No.1
- 伊万里市陶器商家資料館「いまりまだら」『白壁』伊万里市陶器商家資料館だより、No.2
- 伊万里市陶器商家資料館「江戸時代の日本を豊かにした伊万里商人」『白壁』伊万里市陶器商家
資料館だより、No.3
- 伊万里市陶器商家資料館「丸駒の由来」『白壁』伊万里市陶器商家資料館だより、No.4
- 伊万里市陶器商家資料館「犬塚家の歴史—伊万里津の代表的な陶器商人の歴史—」『白壁』伊万
里市陶器商家資料館だより、No.5
- 伊万里市陶器商家資料館「伊万里津関係年表」『白壁』伊万里市陶器商家資料館だより、No.6
- 伊万里市史編纂委員会（1963）『伊万里市史』
- 伊万里鍋島焼会館「伊万里」パンフレット
- 黒田尚美・大森由希子・副島れい子（2008）「佐賀県の色絵磁器について—伊万里焼における素
地の色 白の美学—」『日本色彩学会誌』第 32 巻、114-115 頁
- 古賀稔康「概説伊万里史—中世から現代への歩み—」153-159 頁
- 佐賀県教育委員会（1988）「佐賀県の民謡—佐賀県民謡緊急調査報告書」
- 柴田淳郎（2008）「企業間協働と会社制度— 有田焼産地の事例分析—」『国民経済雑誌』第 197
巻第 2 号、95-112 頁
- 十四代酒井田柿右衛門（2004）『余白の美 酒井田柿右衛門』集英社新書
- 田中時次郎（1976）「大阪商船の伊万里荷積出」『烏ん枕』伊万里市郷土研究会、No.17
- 野上建紀（2017）『伊万里焼の生産流通史—近世肥前磁器における考古学的研究』中央公論美術

出版

- 野上建紀 (2018) 「新刊紹介 野上建紀著『伊万里焼の生産流通史—近世肥前磁器における考古学的研究』中央公論美術出版、2017」『多文化社会研究』長崎大学、Vol.4、425-427 頁
- 浜本隆志 (2009) 「マイセン磁器と食文化—景德鎮・伊万里・マイセン—」『海の回廊と文化の出会い：アジア・世界をつなぐ』313-332 頁
- 前山博 (1971) 「『伊万里焼』の流通 (1)」『烏ん枕』伊万里市郷土研究会、No.8
- 前山博 (1974) 「『伊万里焼』の流通 (5)」『烏ん枕』伊万里市郷土研究会、No.13
- 前山博 (1990) 『伊万里焼流通史の研究』
- 宮木慧子 (2005) 「有田・伊万里焼の「ワラ荷造り」の形態—陶磁器の伝統的ワラ放送技術と形態に関する研究 (1) 『デザイン学研究特集号』Vol.13、No.2、57
- 宮木慧子・石村真一 (2001) 「有田・伊万里焼のワラ荷造り「輪巻き」「菰包み」の起源仮説」『デザイン学研究』Vol.48、No.4、147-158 頁
- 山田幸三 (2013) 「伝統産地の変貌と企業家活動—有田焼と信楽焼の陶磁器産地の事例を中心として—」『上智経済論集』第 58 巻、第 1・2 号、219-235 頁
- 山田雄久 (2008) 『香蘭社 130 年史』香蘭社社史編纂委員会

-
- 1) 犬塚家住宅は、江戸時代後期の文政 8 (1825) 年頃建てられた妻入 2 階建の陶器商家である。建物は間口三間 (5.519m)、奥行八間 (14.825m) で「鰻の寝床」状に細長く、屋根は切妻造の本瓦葺、棟を南北方向にとっている。外観は白壁土蔵造により、防火対策をしている。江戸時代の都市住宅の形も有し、伊万里市に現存する僅かな商家建造物として建築学上も当時の陶器商人の生活を知ることができる。間口が狭く、奥行きが深い敷地の幅いっぱい主屋を建てるのは近世の町割りの典型であった。1 階は京都や博多など、他の近世都市の町家と同様の通り庭形式であり、東側一間の土間が表から裏庭へ通り抜けている。表から続く板間は、商品荷造・荷解き・商品選別など作業場で使用された。ここで算盤の音が響き、商談が繰り広げられた。正面の大戸は揚げ戸であり、滑車と錘で上下でき、昼間は上の戸袋に収納され、夜間は厳重な戸締まりの用をなした。表側には繰上葺という横長三段の戸板を上戸袋に収納できる。奥の板間の東側は一部が吹き抜けであり、採光の工夫がされ、同時に荷を滑車で 2 階へ運べる。奥の板間の西側には神棚があり、枡に入った大黒様が祀られている。五穀豊穰と富を司る大黒様を枡に入れ、ますます繁盛、酌めども尽きぬ富裕を願う商家の心情を知れる。板間の西側には、抽出のある箱階段がある。また 2 階には 5 畳の控えの間とそれに続く 10 畳の座敷がある。座敷は狭い敷地の有効利用のため、東側の床の間と違い棚の奥行が浅くなっている。違い棚は屏風棚と呼ばれ、地袋はなく、4 枚の小幅の棚板を巧みに組み合わせ、天袋には幅広の 2 枚の引き違い戸が入っている。天井は床差し天井であり、棹縁が床の間に直角に配置されている。書院を含めて欄間には透彫が施され、長押しには釘隠しの六葉飾金具がある。建物全体では、1 階 2 階とも押入が多くあり、板間も保管場所とすると、建物の床面積に比べて、かなり収納スペースがあり、陶器商家としての工夫がある (伊万里市陶器商家資料館資料)。現存する商家建築遺構として建築学的に価値が高い建物である。また当時の陶器商人の暮らしを知るためにも貴重である (伊万里市教育委員会 (2002) 16)。
- 2) 3 代石丸源左衛門は、天保 13 (1842) 年 10 月、2 代源左衛門こと重蔵の長男として誕生した。幼名を源次郎、長じて 3 代源左衛門を襲名した。伊万里町で銀行設立機運を盛り上げるため、明治 13 (1880) 年伊万里町の豪家で礼場 (金融業) の松尾貞吉らと講会主人となり、講に加入した伊万里町有志 53 人と

世話をした。その後、松尾貞吉らと上京し、鍋島家や大隈重信など旧佐賀藩出身者を伊万里銀行の株主とするため奔走した。明治15(1882)年3月、佐賀県内初の私立銀行伊万里銀行設立の際は発起人となり、深川熒左衛門や武富熊助とともに伊万里銀行取締役となった。石丸源左衛門は、明治19(1886)年に西松浦伊万里鉄道会を発起し、明治31(1898)年の伊万里道開業に繋げた。明治22(1889)年4月に市町村制が施行されると、5月に初代伊万里町長に就任した(伊万里市郷土研究会(2019)21)。

- 3) 藤田與兵衛は、嘉永5(1852)年11月に伊万里町の菓種商に生まれた。幼名を恒助、長じて與兵衛を襲名した。明治6(1873)年に草場船山の伊万里啓蒙舎で学び、明治14(1881)年に上海に渡航し、商才を磨いた。明治20(1887)年7月から明治35(1902)年6月まで伊万里銀行取締役に就任し、明治31(1898)年の伊万里鉄道開通に尽力した。陶業界にも身を置き、伊万里陶器会社取締役となった(伊万里市郷土研究会(2019)31)。
- 4) 武富家は、伊万里町今町に所在した代々陶器商であった。家の側に伊万里川の水を八谷搦へ送る堀があり「堀端」と呼ばれた。同家屋号「堀七」は「堀端」の「七太郎」から取った(伊万里市郷土研究会(2019)28)。同家には、文化・文政の頃に活躍した七太郎へ宛てた旅商人からの手紙、七太郎の次代の茂十・弟栄助へ宛てた手紙が残っている(伊万里市歴史民俗資料館(1996)57)。同家史料のうち、1冊の大福帳は、弘化3(1846)年から文久元(1861)年の間、同家の他国商人との取引が記され、幕末期の実情がわかる。他国商人は、筑前・紀州・土佐・伊予・新潟などであった(伊万里市歴史民俗資料館(1996)58)。武富七太郎の長男茂十は、跡を継いだが39歳で没したため、伊万里町東町の屋号「唐津屋」岡田家から熊助が10歳で武富家に養子に入った。熊助の「堀七」は、明治初めに横浜や神戸に支店、東京に出張所を設け、伊万里町でも屈指の陶器商となった。他方、明治12(1879)年頃、当時15歳の森永太郎は「堀七」に奉公し商売を学んだ。明治15(1882)年3月、伊万里銀行設立の際には、武富熒助と武富熊助は発起人に名を連ねた。熊助は明治15(1882)年3月から12月まで伊万里銀行取締役となった(伊万里市郷土研究会(2019)28)。
- 5) 本岡儀八は、天保9(1838)年に佐賀の橋本家で生まれ、万延元(1860)年伊万里町本下町の本岡儀左衛門の長女エンと結婚、明治10(1877)年に穀物商の本岡家を継いだ。明治15(1882)年、伊万里銀行設立の際、発起人として名を連ね、4年間、同行副支配人となった。明治18(1885)年に佐賀県令宛の伊万里川河口浚渫願では、伊万里町民総代の1人に名を連ねた。明治19(1886)年1月から6年11ヶ月間、同行取締役となった。任期中に同行は度々移転し、明治19(1886)年6月に同行横浜支店が開設された。そして明治23(1890)年に第3代頭取松尾貞吉の後、明治24(1891)年第4代伊万里銀行頭取となった。大隈重信と親交があり、明治29(1896)年には大隈家の執事宛に同行の融資先紹介に対する御礼の手紙を送付している(伊万里市郷土研究会(2019)38)。明治30(1897)年、鉄道が門司から武雄、有田を通り、早岐、佐世保まで開通したため、伊万里の陸の孤島化を恐れ、地元の豪商や沿線の有志らと有田から伊万里まで線路延長運動をした。明治31(1898)年8月に伊万里鉄道は開業したが、12月に九州鉄道に経営を譲渡した。この資金が伊万里地方の経済を潤し、伊万里銀行の預金が増加した。豊富な資金を元に明治33(1900)年4月、伊万里銀行は本店を現在の佐賀銀行伊万里支店の場所へ新築移転した。本岡儀八の頭取在任期間は後に同行の黄金時代と呼ばれた。明治35(1902)年、横浜支店で17万円ほどの欠損金と回収見込のない3万円の貸付金が発覚し、その責任を取り頭取本岡儀八と横浜支店担当取締役古川源太郎は辞任、後任の頭取には藤田與兵衛が就任し、横浜支店は8月に閉鎖された(伊万里市郷土研究会(2019)38)。
- 6) 山崎文左衛門は、天保2(1831)年9月に杵島郡小田志郷に生まれた。幼少の頃、父と伊万里に移住し、13歳の時陶器の行商から身を起し、伊万里町で有名な陶器商となった。明治4(1871)年9月に森永太郎の叔母イシと結婚し、明治5(1872)年4月に当時8歳の森永太郎を養子とし、明治10(1877)年から明治12(1879)年まで太郎に商売の基本を教えた。明治15(1882)年に私財を投じ、伊万里町西南の湿地を埋め立て山崎町を造成し、明治17(1884)年3月に伊万里町有志と相生橋を架橋した。明治31(1898)年には、伊万里町有志の本岡儀八、田中藤蔵、藤田與兵衛などが伊万里鉄道を建設すると伊万里駅が山崎町の南端に置かれた。これにより伊万里駅から相生橋まで伊万里町を南北に結ぶ停車場通り(現在の駅通り)ができ、町の発展の基となった(伊万里市郷土研究会(2019)42)。

＜山崎文左衛門の4つの教え（文左衛門が森永太郎に示した商売の心得）＞

1. 「如何なる場合においても正当な品のみを扱い、決して不正直なものを売買してはならぬ」
2. 「もし目の前の欲に迷い、不堅実の品を扱うようなことがあったら、決して真の商人となることはできない」
3. 「適当の価（あたい）と信じてその売価を発表したならば、顧客に左右させられても、その価を絶対に引いてはならない」
4. 「急がず十年を一期と定めて仕事をせよ」

（出所）伊万里市郷土研究会（2019）42

- 7) 田中藤蔵は、嘉永2（1849）年10月、伊万里町本下町の豪商石丸家（現在の佐賀銀行伊万里支店）の次男に生まれた。石丸家の向かの田中家（陶磁器や呉服販売）の後継者が絶え、そのために家業存続のため田中家を継いだ。明治20（1887）年1月に当主石丸源左衛門が伊万里銀行の取締役を退くと、その跡を受けて大正3（1914）年まで27年間、同行の取締役をつとめた。明治26（1893）年1月、初代の伊万里町長石丸源左衛門が病没すると、同家の柱である海運部門の亀屋回漕店（大阪商船伊万里代理店）を石丸玄吉から引き継いだ。同行の取締役在任中は、第4代頭取本岡儀八や取締役の藤田與兵衛とともに伊万里有田間の鉄道建設運動をした。明治29（1896）年5月に資本金27万円（約20億円）で伊万里鉄道株式会社ができると社長に就任、翌2月に起工式を行い、工事に取り掛かった。明治31（1898）年7月に工事が完成し、8月に正式に伊万里有田間の鉄道が開通した。しかし、経営が難しく、同年12月、九州鉄道株式会社へ譲渡されることになり、藤蔵は伊万里鉄道株式会社の清算にあたった（伊万里市郷土研究会（2019）29）。
- 8) 一番ヶ瀬國輔は、伊万里町中町で生まれた。生家は屋号「永楽屋」といい、唐物商として呉服や太物、洋端物など商った。明治時代、政府は近代国家建設のため、富国強兵政策を進めた。そこで九州の防衛を強化し、大陸出兵拠点となる軍港を九州に設置することになった。明治16（1883）年に伊万里湾、大村湾、佐世保湾が候補に上がり、水路などが測量された。國輔ら伊万里町の有力者らは伊万里に軍港誘致を考えた。九州の鉄道は、明治28（1895）年に門司－武雄間が開通し、明治30（1897）年には有田を通して早岐、軍港があった佐世保まで開通した。伊万里の離島化を怖れた伊万里銀行役員は、地元豪商や沿線有志と協力し、有田から伊万里まで線路延長する運動をした。そこで明治29（1896）年5月、伊万里鉄道株式会社が設立された。國輔は取締役に就任し、同鉄道の敷設に尽力した（伊万里市郷土研究会（2019）22）。